



日頃から、教育学部同窓会の活動推進に多大なるご理解とご協力を賜り、深く感謝申し上げます。さて、先日、『高校生のなりた職業、教員一〇年連続首位』（二〇二五・一一・九新潟日報）ベネッセ教育総合研究所と東大社会科学研究所の共同調査による」という記事を目にしました。この調査から分かることは、「教員」は、今もなお、子どもにとって魅力的な職業、たということ。しかし、教育現場では、令和七年度の県内の教員採用選考検査の倍率が、小学校では二倍を切り、教員のなり手不足、教員不足が喫緊の課題となっています。また、大量退職を迎え、これから教員になる人にバトンをつけないでいく人材育成（恩送り）も課題となっています。

当校は、毎年二名の新採用教員が配置されます。新採用から三年目の教員六名中二名が、新潟大学教育学部の卒業生です。先日、そのうちの三年目の職員が、全体授業研究を行いました。何回も理科センターに通い、子どもの実態に

即した教材は何かを考え、指導案を作り、子どもが目を輝かせ生き生きと学習に取り組む、理科の授業を公開してくれました。二年目の職員は、支援が必要な子どもが大勢いる一年生の学級担任として、子どもの声に耳を傾け、毎日粘り強くかわかってきています。

若手教員のやりがいや成長は、OJTによる支援・指導が重要です。当校は同じ教育学部卒の先輩、中堅・ベテラン教員がしっかり支えてくれています。教育学部同窓会は、令和九年度に創立七十五周年を迎えます。会員相互の資質向上と親睦、絆強化を図り、母校の発展に寄与する持続可能な同窓会となるよう、会を盛り上げていただければ幸いです。そして、これからも子どもにとって魅力的な職業の教員が、本当にやりがいのある、子どもが憧れるくらい輝く教員となれるよう、それぞれの場所、立場で、教育を支えていってほしいと願っています。

持続可能な
教育学部同窓会を
目指して



三十三年振りに初任校への配置となった。入学式の日、保護者となつたかつての教え子たちと再会した。頼もしく成長した姿に安堵と喜びを感じた。授業が始まると、「僕、〇〇〇〇の息子です。」や「私の母、〇〇〇〇っていうんですけど覚えていますか?」、「私の父も叔父も先生が担任だったんです。」など、初任者の頃の自分を知っている人たちの多さに驚いた。当時の自分は子どもたちにはどう映っていたのだろうか。自分に与えられた役割の大きさに、身が引き締まる思いの毎日である。

ある日の学習参観に来ていた教員から、「先生の授業が楽しくて理科に興味をもつようになったんです。実験が好きで化学の勉強をするようになって、それを生かせる仕事に就いたんです。」と聞かされた。この子の成長に、少しでも役立てた気がしてとても嬉しかった。

私たちは、子どもたちの生き方や人生に少なからず影響を与えている。今一度初心に立ち返り、子どもたちの将来に夢や希望を与えていけるよう努めていこうと思う。

花鳥風月

情報交換
情報発信

新潟大学
教育学部同窓会
ホームページ

学校紹介 ①

校園連携・地域連携の取組

魚沼市立須原小学校

一 はじめに

当校は令和五年度に入広瀬小学校と統合して、東端は福島県境、西端は長岡市境に至る広大な学区となりました。へき地校として区分されている当校ですが、学区は一こども園・一小学校・一中学校からなり、地域の皆様からは学校への多大な協力と期待をいただいています。これらの特徴から、園・小・中の連携、地域との連携が教育活動の鍵となっています。

二 取組の内容

(一) 校園の連携

当学区の三校園は、情報交換と研修を定期的に行っています。園から小、小から中への進学において、園小中の連携が円滑な繋ぎに役立っています。園小の具体的な取組として、園小職員が相互に学校を訪問し、小学校入学前と入学後の児童の様子を見守っています。また、年長児と一年児童の年間を通じた交流を計画的に行うなど、早い段階から園児が小学校に慣れ親しむように配慮しています。

小中の取組として、全校児童が中学

生と交流するいじめ見逃しゼロスクール集会を設定しています。中学生がコーデイネーターとなり、縦割り班で話し合い活動を行っています。中学生は小学一年生から六年生までの児童の目線に立った働きかけを行い、小学生は中学生のリーダーシップや一つの考え方を学んでいます。



(二) 地域との連携

魚沼北地域では、地域での活動の担い手の高齢化や減少が進んでいます。学校が地域の力をお借りして子どもたちを育ていくために、また学校を核に地域を活性化していくために、昨年度からは小中合同の学校運営協議会に発展させました。

当学校運営協議会の取組として、かつて行われていた地域運動会を小学校の運動会の中に「地域種目」という形で復活させました。地域の誰もが参加

できる種目として、今年度は「借り人競走」を行いました。「地域に住む〇〇な人」をテーマに人探しを行い、見つけた方にインタビューをするという内容でしたが、予想以上の盛り上がりが見られました。地域の活性化につながる活動ができたと感じています。

三 これから

今後の課題は、より地域の行事に児童が主体的に参画できるようにすることが挙げられます。例えば二月の旧正月に行われる「さいの神」です。例年地域のコミュニティー協議会に計画していたため、児童は祭りに使う道具等の製作のみの活動となっていました。これを計画段階から児童が参画することで、児童が地域の一員としての意識をもったり、地域を盛り上げていく実践力を高めたりすることに役立つのではないかと考えています。

園小中の強いつながりや地域からの厚い協力は、当校の強みです。今後もしこく・なおく・たくましい子どもたちを、学区の皆様の協力のもと育んでいきます。

(文責 教頭 佐藤 宏)

令和七年度 会務報告

令和七年

4・3	入学式(朱鷺メッセ) 教育実践学研究所 入学ガイダンス
4・9	令和六年度会計監査会 (アートホテル新潟)
5・10	第一回本部会(新潟教育会館) 【評議会に向けての議案 審議、決定】
6・14	評議会(新潟教育会館) 【令和六年度会務報告・ 決算報告】
7・20	【令和七年度活動の重点 ・専門部活動計画・役員 及び予算案承認】
9・3	支部長・学科代表者会 教育新報「第189号」発行 事務室移転(D118へ) 第五十回同窓生の集い (アートホテル新潟)
9・20	全学同窓会設立20周年 記念式典 (ANAクラウンプラザホテル)
10・18	
1・22	令和八年 大学教職員と同窓会との 懇談会・懇親会 (アートホテル新潟)
2・20	教育新報「第190号」発行
2・28	第二回本部会(新潟大学) 卒業式・祝賀会
3・23	(朱鷺メッセ・東映ホテル)

学校紹介
②

「地域と共に未来を創る学校」

新潟市立岩室中学校

当校は新潟市西蒲区にあり、旧岩室村を学区とし、全校生徒は百四十八名です。学区は広く、学区内には蒲原平野、弥彦山、間瀬海岸などがあり、四季折々の美しい姿を見せてくれます。また、「全国おもてなしランキング」で二年連続全国一位となった岩室温泉もあります。

校内では挨拶が飛び交い、授業中も仲間との対話的な活動が多く組織され、学習を進めることができます。

【教育活動のさらなる充実にむけたCSとの連携】

学校運営協議会（CS）と連携・協力をしながら、教育活動の見直しや充実を図っています。

（一）総合的な学習の見直し

～岩室学の充実～

令和四年、五年度は主に「総合的な学習」の見直しを進めました。そこでは目指す生徒像の実現に向けて、育みたい資質・能力を明らかにすることからスタートしました。次に、そういった力を身に付けさせるため、総合的時間の活動内容を検討したり、地域人材を活用したりしながら進め、岩室を学びのステージとした地域探究の活動を

展開していきました。また、これら地域での学びを「岩室学」と名付け、三年間を見通した学びが創られました。この取組は、昨年度、時事通信社より「教育奨励賞」をいただきました。

（二）部活動地域展開に向けて

～岩室スタイルの構築～

令和六年度からは、部活動地域展開に向けた検討を進めています。当初、地域展開に伴う受け皿となりうる地域クラブはありませんでした。持続可能性や保護者の負担軽減という視点から保護者会主体のクラブではなく、CSや学区内にある児童館と連携しながら体制作りを進めています。『地域で子どもを育てる』理念の下、本格運用に向けて、令和七年十一月現在では試行を行っており、来年四月の本格実施に向け準備が進んでいます。

【地域から学ぶ、そして地域に還元、貢献する】

様々な場面で地域の皆様の協力を受けて教育活動が進められています。同時に、中学生ができる地域貢献や、地域への還元も大切にしています。

『矢川灯籠流し』『和納十五夜祭り』『間瀬クリーンアップ作戦』といった

地域行事では、地域の方々と活動を共にしています。

また、昨年度は岩室観光協会からの協力依頼を受け、新たな岩室温泉のロゴマークのアイディア作りを行いました。三年生は中学校での学びのまとめである『岩室すみよいまちプロジェクト』で



関係人口を増やすための策を考え、

地域の方々をゲストに迎え発表しています。



【これからの未来に向けて】

- (一) インテグリティの向上
- (二) 自治力の向上
- (三) できない理由を探さない、どうしたらできるかを考えよう！

この三つは毎日の生活の中で、生徒も職員も大切にしています。

今後も教育活動全体を通して、教育目標である「よりよい姿を求めて学ぶ生徒」の実現に向けて生徒、教職員、保護者、地域が一体となって教育活動を進めていきます。

（文責 校長 小塚 忠昭）

事務局だよ！

新しい歴史のスタートに向けて②

令和九年度は教育学部同窓会創立七十五周年にあたります。同窓会ではその日に向けて三年計画で準備を始めております。

コロナ禍を克服した今、私たちは、かつてのような熱い思いの同窓会を再構築したいと思っております。そのためにも、まず「参加する同窓会」にすることが重要です。そのターゲットの一つが六月の評議会における「リモート参加導入」であり、九月の「同窓生の集い」及び十月の「全学同窓会交流会」の参加者拡大の取組です。「集い」では、今現場における喫緊の課題である「特別支援」「不登校」「学級経営」などに造詣の深い先生方を三回シリーズでお迎えし、魅力ある会にすることです。今年度は、新潟大学の有川宏幸教授からお話しいただきました。さて来年度は？再来年度は？

十月の「全学同窓会交流会」では、過去、教育学部同窓会本部を支えてくださった役員の方五十人に案内を差し上げたところたくさんの方からご参加いただき、幹事学部としての面目を躍如いたしました。お陰様で参加者も右肩上がりに増えてまいりました。今後ともさらに参加者が増えることを願っております。



九月二十日、アートホテル新潟駅前において同窓生の集いが開催されました。「特別支援教育の現在、過去、未来」と題して、新潟大学教育学部副学部長の有川宏幸様よりご講演をいただきました。

一 講演会

○有川宏幸様 プロフィール



未来

千葉県生まれ。公認心理師、臨床発達心理士であり、筑波大学大学院修了後一九九五年四月より発達相談員として大阪府岸和田市保育課、同保健センター勤務。乳幼児健診等における障害のある乳幼児の発見とその後の保護者対応、心理面のフォロー、療育・保育等における特性に応じた関わり等の相談など幅広い業務に携わられました。二〇〇六年十月より現職です。

○ご講演

大学勤務前は、発達相談員として勤めておられました。その仕事は「障害を見つめる仕事」であり、発達のずれがあるかどうかを判断する役割を担っ

ていました。当時は早期発見・早期対応という考え方が重視されていた時代でしたが、世界の国によってはそうした考え方が発見という名の差別ではないかと、否定的な見解もあることも指摘されました。また、毎年子どもの数は確実に減少している一方、特別支援教育を必要とする子どもの数は約二倍に増加していることが紹介されたことに驚かされました。

次に、小学校で、自動販売機を例に「誰にとつて優しいか」を考えた授業が紹介されました。子どもの具体的な様子が紹介され、障がいをもっている人に着目させ、子どもがしっかりと考えていることに感心させられました。

また、二〇〇一年に出されたICF（国際生活機能分類）や、特別支援教育の日本の歴史の変遷について説明がありました。日本のインクルーシブ教育が十分に進んでいないという指摘もいただきました。

最後は、アイスランドの教育視察についてです。子どもが自分のカリキュラムを持ち、教員が進捗をモニターするシステム、机に座らない授業風景、日本とは大きく異なる教育システムが紹介されました。すべての子どもが自由に学習している様子が印象的でした。特別支援教育とは何かを考えさせられる貴重な意義深い時間となりました。

二 懇親会

有川宏幸副学部長様、大庭昌昭教育実践学研科長様をお招きし、懇親会が行われました。講演の感想や懐かしい話で盛り上がる楽しい一時となりました。



令和七年度新潟大学・全学同窓会交流会が十月十八日（土）にANAクラウンプラザホテル新潟二階「芙蓉」で開催された。今年度は、全学同窓会設立二十周年の記念の年にあたり、教育学部同窓会が幹事となつて計画、運営し、記念講演とスペシャル対談企画が行われた。

開会の挨拶では、牛木辰男学長から、本学が昨年度創立七十五周年を迎え、文部科学省の地域中核・特色ある研究大学強化促進事業に採択され、「脳」といのち「食と健康」のイノベーションを創出する研究拠点としての役割について語られた。

記念講演では、「新潟大学の顔 門標四文字」を演題に新潟大学教育学部教授の岡村浩様よりご講演をいただいた。



「新潟大学」の門標文字、校名板の筆者である竹内臨川氏についての書作品を紹介いただきながら、門標文字、校名板の書風や隸書についての話があった。さらに、門標

文字が縦書きから横書きになった配字についての興味深いお話を伺うことができた。

スペシャル対談企画では、ラジオパーソナリティの遠藤麻理様と元古町芸妓のおおい様による対談が行われた。「人生いろいろーやっぱりニイガタ推しー」という対談テーマで、お二人からさまざまなお話を伺うことができた。



あおい様からは、古町芸妓を志した経緯や芸妓として身に付けないければならない作法や心構えなどについてお話をいただいた。お座敷でのさまざまな方々との出会いなど芸妓の世界を通して学ばれたことについて楽しいお話を伺うことができた。遠藤麻理様からも、幼少期のエピソードなどを交えながら、仕事を通して関わってこられた方々や出来事について、お話しいただいた。最後に、お二人とも、「新潟には良いところが沢山ある。これからも新潟のよいところを発信していきたい」とおっしゃられていた。

教育学部・教育実践学研究科教職員と同窓会との懇談会・懇親会報告

交流部 副部長 藤塚 静治

一月二十二日（木）、アートホテル新潟駅前を会場に、「令和七年度新潟大学教育学部・教育実践学研究科教職員と同窓会との懇談会・懇親会」を開催しました。

学部並びに教育実践学研究科からは、柳沼学部長、大庭教育実践学研究科長を始め十二名の教職員の皆様が、同窓会からは臼杵勇人会長以下十六名が出席しました。今年度を総括する事業であり、有意義な情報交換が行われました。

懇談会では、臼杵同窓会会長から、教育界の最新情報と課題、教育学部同窓会が運営担当した全学同窓会設立二十周年記念事業開催報告と御礼、同窓会創立七十五周年に向けての挨拶などがありました。

柳沼様は、教育学部の現状と課題と深刻化している教育課題の改善について、これまで様々な場面で教育の重要性をアピールしてきたこと、また、現場での実習や日々の学びを通して、学生の資質をより高めて現場に輩出していくことの使命について話されました。

大庭様は、教職大学院が今年度十期生を迎えるにあたり、これまでの同窓会からの支援への感謝、さらに教職大学院の基本理念の実現に向けた院生の主体的な学びへの支援と教育課程の刷新について話されました。

新について話されました。

同窓会からは、各専門部等（事務局・研修部・広報部・組織部・交流部・全学同窓会）が今年度の事業概要について報告を行いました。意見交換後、最後に灰野仁同窓会副会長の「子どもを思う熱い思いを共有する大切さから、現場にて教員が互いに意欲をもって力量を高めていきたい」と熱のこもった挨拶で会を閉じました。

懇親会では、加藤茂夫副学部長様からの乾杯のご発声を皮切りに、懇親を大いに深めることができました。懇談会での話題を基に新潟の教育の現状や未来の在り方、双方の夢や願い、そして今後の期待など幅広く情報交換を行いました。

締めくくりは、教育実践学副研究科長の雲尾周様から丙午の年にちなんで情熱をもって駆け抜けようという氣勢を上げていた。だくとともに、中野隆一同窓会副会長の挨拶で会を閉じました。ご参会の皆様のおかげで大変充実した事業となりました。



新潟地理研究会

（新大同窓会 地理科）総会

令和七年十一月九日、「新潟地理研究会」を開催しました。新潟大学より、教育学研究科 准教授の前田陽介様にご参加いただきました。

本会は、新潟大学教育学部・教育人間科学部の地理学教室の卒業生と在校生の約七百名で組織されていて、地理学教室の発展への寄与と会員相互の親睦をはかることを目的としています。

毎年、総会後には大学の先生や現役の学生から、現在の研究について紹介していただいています。

前田先生からは、現在の地理学教室の様子について、お話しいただきました。過去の卒業論文を整理する中で、貴重な資料やデータが見付かることがあり、それらを丁寧に整理されているとのことでした。

今年度の研究紹介では、現役学生の鈴木さんから、シドニーの一部地域におけるリトルインディアの形成過程についてお話がありました。地理学教室を卒業して久しい会員も、かつてのように関心をもって聞きました。その後懇親会でも研究紹介の話題になりました。

今年度も会員相互の親睦を深めることができた時間になりました。来年度以降も、卒業生と大学との結び付きを強め、より充実した集いになるよう、努めてまいります。

（文責 学科代表 篠木 格）



会員の広場

野球の経験を通して



田上町立田上小学校

丸山 尊仁

新潟大学を卒業し、教職に就いてからの一年がもうすぐ終わる。学生の頃よりも月日が流れるのを早く感じている。経験したことのないことが多く、苦難を感じることもあるが、新たな力が身に付くことを感じながら、探求心を持って取り組むことができていく。このような働き方ができているのも、私がこれまで十六年間続けてきた野球での経験が糧になっている。

私は、野球を通して、継続することの大切さや支えてくれる人の大切さを学んだ。学校生活では、学んだことが大いに生かされている。子どもたちへの指導では、子どもたちの様子を窺いながら、うまくいくいかない関係なく継続的に指導できているし、先生方には助けってもらうことがかりだが、協力しながら取り組んでいる。

私一人の力ではできないことがまだまだ多く、今は支えてもらうばかりの日々である。しかし、自分が一生懸命にならない限りは成長もしない。支えてもらっていることを当たり前に思わず、今まで自分がやってきたように、常に方法を模索しながら、これから長く続く教員人生を充実したものとしていきたい。

教務主任のあの先生に感謝を



新潟市立中野山小学校

深井ありさ

小中学生時代、可もなく不可もなかった私（高校時代は概ね不可）は、先生に褒められた記憶が殆どない。だからこそに残っていることがある。

中学生、部活終了後、部活仲間六名で、合唱曲を大大大熱唱しながら廊下を歩いていった。大きすぎる歌声が職員室前に差し掛かったその時、職員室の引き戸がガラララと勢いよく開き、教務主任の顔がヌツと出てきた。黒く鋭い眉と眼光が私達を捉えた。

「あ、うるさかった。怒られる。」一瞬で覚悟を決めたその時、「すごく上手です。」笑顔の教務主任が言った。驚いた。ドキドキした。皆で「ありがとうございます。」と挨拶した。え！超嬉しい！

だから私はいつでも歌声を褒める先生になった。社会の授業中「うっせえうっせえうっせえわ」と歌う子は、褒めると笑顔でノートを書き始めた。先生、あの時褒めてくれてありがとうございました。でももし先生が教頭先生だったなら、勘違いしていてごめんなさい。

原点



聖籠町立聖籠中学校

田中 健太

新潟大学を卒業し、何もできない新人教師だった頃、「大学で学んだだけでも、全然通用しないなあ」などと生意気を言いながら目の前のことに追われる日々を過ごしていた。

教員になって二十年以上が経った今、私の私らしさ、自信となっているものは、大学時代に培われたものだと感じている。英語科の学友からは、向上心を学んだ。共に単位取得や教育実習を乗り越え、英語力を高めた。陸上競技部では主将として競技に打ち込み、率先垂範、背中で語ろうと努力をした。部員百名をまとめるため、一人一人とのコミュニケーションを大切にしたい。

令和の時代、学校も変わる時である。高め合う教師コミュニティの大切さを強く感じている。その旗振り役となる教頭として大切な向上心、調和を創り出すコミュニケーション能力は、新潟大学での四年間のおかげだ。原稿を書く機会が、自分の原点を思い出すきっかけとなった。

移住への誘惑



佐渡市立畑野中学校

福井 晴人

カナダのプリンス・エドワード島（以下PEI）に友人がいる。PEIは小説「赤毛のアン」の舞台となった島である。娘がアンの大ファンであり、小説に描かれている島の美しい自然にも魅了されて、七年前家族でPEIを訪れた。その時知り合ったのが、メイソン夫妻である。一度だけ、夫妻を佐渡にお招きしたことがある。「佐渡はPEIと、とてもよく似ていますね。」夫妻の言葉に驚いた。何でこれまで気がつかなかったのだろう。

「新しい自分になりたいなら北へ、昔の自分に戻りたいなら南へ行きなさい。」ある漫画の台詞だ。私は北へ、PEIへ行きたいのだからか。PEIの冬は厳しい。それでも、新しい自分を見つけることができるのだろうか。役職定年まであと二年。小説の終わり、アンが新しい希望に向かって走り出す時の言葉が、私を誘惑する。
「God's in his heaven. All's right with the world」

市民育成を目指した社会科授業の改善 教育実践コース 樋口 智彦 (新潟市立大形小学校)

はじめに

社会には様々な問題が存在している。その問題の解決のためには、民主主義社会における市民を育成することが必要だと考える。市民育成を目標に誕生した教科が社会科である。しかし、筆者のこれまでの社会科授業を振り返ると、市民を十分に育成できていないと感じていた。そこで筆者の勤務する小学校段階における、市民を育成するための社会科授業の改善を目的に、まず「市民」とは何かについて文献調査から明らかにし、そのような市民を育成するための小学校社会科授業を構想し、実践した。

「市民」とは何か

文献調査から筆者が定めた市民像は以下の通りである。

- i 多様な価値観をもとに人々が幸せに暮らすことができる社会について考え、自己の考えを表出できる。
- ii 他者と協働して人々が幸せに暮らすことができる社会をつくろうとする意志をもつことができる。

上記の資質・能力をもつ者を「市民」とし、このような市民としての姿が表れる授業構成について実践を

もとに考察した。

1年次の実践

小学校第3学年の地域の安全を守る働きの単元において、「高齢者が関わる事故の多さ」を教材として取り上げ、「高齢者の事故を減らすために、社会の中でどう取り組むとよいか」を考える実践を行った。児童は、高齢者を守るという視点で、高齢者事故を減らすための社会の仕組みについて考えた。本実践の考察から、「社会の複雑さが表れる社会問題を教材とすること」「多様な他者に注目し、その視点を児童が取り込んで考えること」「自分の生活と社会をつなげて考えること」が市民育成のための授業改善のキーワードとなることが見えてきた。

2年次の実践

iiの市民像のうち「社会をつくろうとする意志をもつ」という点が1年次の実践において課題となった。そこで「子どもの意見表明」を中核に据えた授業を2年次に実践した。具体的には、小学校第6学年の政治単元において、子どもの生活の中から問題を発見し、その改善点を児童が考え、改善の願いを行政に要望するという授業である。このとき、多様な価値観に触れるため、意見を集めることを重視した。集まった意見をもとに行政に要望する内容を児童は検討した。現在、2年次の実践の価値について考察を進めている。

教職大学院生 実践報告

小学校体育ボール運動領域ネット型ゲームにおける 「ボールを持たないときの動き」に着目した授業実践 教育実践コース 塩沢 輝大 (ストマス)

1 研究の背景

小学校体育のボール運動領域では、ボール操作とともに、ボールを持たないときの動きが学習内容として位置付けられている。しかし、ネット型ゲームの授業では、技能差への配慮からボール操作の簡易化が中心となり、攻撃を成立させるためのボールを持たないときの動きにまで十分に焦点が当てられないまま学習が進む状況が見られる。こうした課題意識から、本研究では、ボールを持たないときの動きを中核に据えた授業実践に取り組んだ。

2 研究の目的

本研究は、ネット型ゲームにおいて、ボールを持たないときの動きを中核に据えた授業が、子どものゲーム参加や攻撃の理解に与える影響を明らかにすることを目的とする。

3 一年次の実践の実際

一年次の実践では、タスクゲームを通して、助走やセッターがネット際へ移動する動きが生起する様子を

見取ることができた。一方で、その動きは、子ども自身が動きの意味や役割として十分に理解しているとは言いがたい点が課題として明らかになった。

4 二年次実践の実際

二年次は、一年次の課題を踏まえ、ゲーム中の経験をもとに、攻撃の連携や役割について考えを深められるよう、振り返りと共有の活動を中心に授業を構成した。

ゲーム後に三段攻撃の連携がうまくいった場面や難しかった場面を振り返り、得点につながった理由や工夫した点について、模造紙を用いて共有した。これらの活動を通して、子どもたちは、セッターの移動と三段攻撃の意味を経験と結び付けて捉えていたと考えられる。

5 二年次実践の成果と課題

二年次の実践を通して、子どもたちは、仲間の位置を見て自分の役割を判断し、移動や声かけを行いながらゲームに参加する姿を見せるようになり、ゲーム参加の質が高まったことがうかがえた。一方で、理解の深まりには個人差が見られ、安定した判断につなげるための手立てについては、今後の課題として残った。

大学の
コーナー

学校現場で活かす認知行動療法

新潟大学人文社会科学系 佐藤 友哉

はじめに

筆者は、本学において、教育学部における教員養成、学部・大学院における公認心理師および臨床心理士養成に主に携わっている。筆者の専門は、臨床心理学である。臨床心理学にもさまざまな学問領域があり、特に認知行動療法を専門とした研究および実践活動を行っている。認知行動療法は、カウンセリングの技法のひとつであり、その使用には専門技術の習熟が求められるものの、その考え方は、教育現場における生徒指導および教育相談に非常に有用であると考えている。

そこで本稿では、筆者が教育学部の生徒指導および教育相談に関連した授業において学生に伝えている「教育現場で活かせる認知行動療法」の視点をお伝えしたい。

問題の整理の視点

児童生徒の問題に対する手立てを考える際は、当該問題に対する情報収集をし、アセスメントを行っていく。この際、闇雲に情報を収集するのではなく、ある程度、視点を絞って情報収集を行っていくと、手立てが思いつきやすい。

以下に認知行動療法の観点に基づいた情報の整理の視点を挙げる（佐藤他、2019・嶋田、2021）。

(1) 誰が困っていますか？(キー！

パーソン) 学校現場での問題であるので、児童生徒の問題であることは間違いないが、働きかけやすい(効果が期待しやすい)とどこかを整理することが肝要である。当たり前のことではあるが、問題意識を持っていない人は行動を変えることは難しい。問題意識を持っていない人に、「すべき」と言ってもうまくいかない。逆に言えば、問題意識を持っていれば動いてくれる可能性が高まる。私がスクールカウンセリングをしていた際、子どもが困っておらずに、親や学校職員が困っている場合も多かった。もし、児童生徒の周囲に問題意識がある場合には、問題意識がある者の行動を変容することで、間接的に、児童生徒の問題を改善することを試みると良い。

(2) 問題行動が生じた原因は何ですか？ 児童生徒の問題に遭遇したときに「生じた原因探し」を始めるのと、理解したつもりにはなることは多いが、同時に今日明日からできる手立ては思いつかないことが多い。なぜならば、我々は過去にタイムスリップできないので、「真の原因」を立証することは不可能だからである。したがって、生じた原因のなかで、解決できるものがあるならば、とりあえず解決してみるという視点を持つてみると良い。これの解決「だけ」にはこだわらないことが重要である。例えば、生起

した原因としてよく出てくるものとして「家庭環境」があげられるが、保護者が問題意識を持っていない限り家庭環境にアプローチすることは難しいことが多い。

(3) 問題行動が維持している原因は何ですか？ 問題が生じた原因の解決ができなくとも、「維持している原因」に着目すると、当面の問題解決の選択肢が増えることが多い。「維持している原因」は、「今、ここで」続いている原因なので、現在にいる我々もアプローチができる。不登校の場合、「生じた原因」「維持している原因」は別物であることが少なくない。例えば、不登校を例に挙げると、生じた原因としては、いじめや、対人関係上の失敗など具体的なイベントが考えられたとしても、維持している要因としては、生活リズムの不安定さ、家の居心地の良さなど別の要因が考えられることもある。

(4) 疾患の可能性はありますか？ 問題行動がある疾患の「症状」であること、介入そのものは機能しにくいことがある。疾患としての症状が出ている場合は、薬物療法の可能性も視野に入れないながら、支援を進める必要がある。また、神経発達症(発達障害)の可能性が考えられる場合は、特性そのものの根本の改善というよりは、特性とうまく付き合っていく視点も必要となる。

(5) 当面の目標をどこに置きましようか？ 当面でできることと、長い目でみることを分けて考える。不登校であるからと言って、すぐに登校することが目的となるわけではなく、まずは、今日明日からできそうな目標に落とし込み、その積み重ねの先に登校や社会復帰を考えていくべきである。また、その目標は、具体的に測定できる行動に落とし込むことが肝要である。

さいごに

今回は、認知行動療法の紹介として、問題の整理の視点的紹介をした。これらは問題の内容にかかわらず、共通している視点である。認知行動療法では、その他にも各問題に対する具体的なさまざまな介入技法が開発されている。さまざまな技法は存在するものの、(a)過去の問題よりは、「今」(here and now)の取り組みやすいところから働きかける、(b)さまざまな問題を、具体的な行動に翻訳し、具体的な行動変容を狙っていくところに大きな特徴がある。

学校での実践や共同研究など興味があれば、ご連絡ください。

引用文献

佐藤 友哉・小堀 彩子・山田 亮(2019)．第3章 児童生徒の問題行動とその対応(pp. 29-40)．松井賢二・横山 知行(編著) 生徒指導・教育相談・進路指導 東洋館出版社 嶋田 洋徳(2021)．実践入門！学校で活かす認知行動療法 ほんの森出版